『栄花物語』における"うるはし"(一)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北村, 英子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4672

『栄花物語』における〝うるはし〟（一）

北村英子

『栄花物語』は前編の三十巻は関白藤原道長の権勢と、栄華が赤染衛門によって描かれたとされ、後編の十巻は道長亡き後、頼通の時代を出羽弁によって描かれたとされている。この物語は宇多天皇から堀河天皇まで十五代、二百年にいたる編年史を仮名文で記し、全般的に紫式部が執筆した大作『源氏物語』の影響が強く、とりわけ主人公光源氏の権勢と栄華の人生を範とし、藤原道長の権勢と栄華の人間像を、『栄花物語』の世界の主人公として、描かれていったのであろう。

こういった作品において「うるはし」という語の意味や用法等の諸相について、用例をすべて検討しつつ考察していく。また、「『源氏物語』における〝うるはし〟」については、すでに研究してきた通り七十二例を数え[1]、その特徴をみてきたが、この『栄花物語』においても、およそ六十例を数え頻出する。この「うるはし」の意味、用法等の諸相についても『源氏物語』の影響をみてみたい。

では『栄花物語』における「うるはし」の用例を逐次揚げながら検討していく。

①心ことに御茵（しとね）などまゐり、さるべき女房たちなど華（はな）やかに装束（さうぞ）きつつ出でゐて、「入（い）らせたまへ」と申せば、うちふるまひ入らせたまふほど、いとうつくしければ、「あなうつくしや」など、めできこゆるほどに、茵（しとね）にいとうるはしくゐさせたまひて、「何（なに）ごとをきこえたまふべきにか」と集りて、扇（あふぎ）をさし隠しつつ、おしこりてみな居並（ゐな）みて[2]、（巻第一　月の宴）

新年には、かの八の宮永平親王の御装束を立派に着飾らせて、中宮御所へ拝賀のため参らせ申される。人々は八の宮永平親王に関心がよせられ、その可愛さに視線が集中する。永平親王は茵にきちんと行儀正しく座って、「御病気の由を承りまして参上いたしました」と奇妙なことを言うのである。

こういう描写中に、八の宮永平親王が中宮御所という改まった日の改まった場所で茵に「うるわしく」座るのである。この「うるは

し」は茵にきちんと正座することをいう。少しの乱れのない座った姿勢に対して用いている。改まった日の改まった環境で、改まった装束で、きちんと改まり行儀よく正座するのである。

次の用例を検討していく。

②帝の御心いとうるはしうめでたうおはしませど、雄々しき方やおはしまさざらんとぞ、世の人申し思ひたる。東三条の大臣、世の中を御心のうちにしそして思すべかめれど、なほうちとけぬさまに御心用ゐぞ見えさせたまふ。帝の御心強からず、いかにぞやおはしますを見たてまつらせたまへればなるべし。（巻第一　花山たづぬる中納言）

円融天皇の御性格が「うるはしうめでたう」とあり、「うるはしう」は「めでたし」と協調し、御性格が「きちんと」している事を立派だと称えている。『新編日本古典文学全集―栄花物語』の頭注一四によると次のようにある。

「うるはし」は、きちんとしている、きちょうめんだ、の意。ここは円融帝の物事の判断・処理が適確であることをいっているのであろう。

とあり、円融帝の内面的な判断力、外面的な行動力がきちょうめんで勝れている事を「うるはし」と表しているが、しかし、「雄雄しき方やおはしまさざらん」とか、「帝の御心強からず」と「うるはし」と対立的に描かれている。したがって、円融帝の御性格は「きちんと」しているが、男らしい力強さがなく少し女性的であるようだ。『源氏物語』においても、性格を「うるはし」と表している例は次の通り見当たる。

○やがて出で立ちたまはむとするを、心やすく対面もあらざらむものから、人もかくのたまふ、いかならむ、坎日にもありけるを、もしたまさかに思ひゆるしたまはば、あしからむ、なほよからむことをこそ、とうるはしき心に思して、まづこの御返りを聞こえたまふ。[3]（「夕霧」）

とあり、夕霧の御性格がきちんとしている事に対し「うるはし」が用いられている例はあるが、『源氏物語』にはこういった例はあまり多くの数をみない。むしろ同じ歴史物語である『大鏡』にこういった用い方がみられる。

○この殿の御心、まことにうるはしくおはしましける。皆人聞き知らしめしたることなり、申さじ。[4]

○枇杷殿をば、「あまり御心うるはしくすなほにて、へつらひ飾りたる小国にはおはぬ御用なり」と申す。

○世次「それはまた、しかるべき前の世の御報にこそおはしましけめ。さるは、御心いとうるはしくて、世の政かしこくせさせたまひつべかりしかば、世間にいみじうあたらしきことにぞ申すめりし。

○御心いとうるはしくおはします人の、信をいたさせたまひしかば、大菩薩のうけ申させたまへりけるにこそ。

このように心の状態が勝れている場合や清浄美の場合に用いられている。そして、いずれも堅苦しい雰囲分の中で、高貴な男性に対

して使われる。

さて、今の場合も堅苦しい雰囲気の中で、最高位の男性の堅苦しい心の状態に対して用いられる。本用例中の「うるはし」は「きちんと」とか「端正で」と語釈するのが最も文脈に適う。そして「うるはし」は「めでたし」とよく協調し、「帝の御性格は大そうきちんとし立派である」と現代語訳をする事が出来る。

次の用例を検討していく。

③中納言殿の、御かたちも心もいとなまめかしう、御心ざまいとうるはしうおはす。この中納言の御外腹の太郎君、大千代君と聞ゆるを、摂政殿とりはなち、わが御子にせさせたまひて、このごろ中将など聞ゆるに、嫡妻腹の兄君を小千代君とつけたてまつりたまへり。（巻第三　さまざまのよろこび）

中納言殿（道隆）は、ご容姿・心は「なまめかし」といい、御心ざまは「なまめかし」の対極的用法である「うるはし」を用い区別している。すなわち、中納言殿（道隆）という高官位の男性の御容姿・心は品があって優雅で、御性格はきちんとしていらっしゃるのである。「なまめかし」は品を伴った優雅さをいい、「うるはし」は「きちんと」・「端正」という意味で乱れのない堅苦しさをいう。中納言殿（道隆）の行動は常に乱れがなくきちんと処理されていくのである。こういったきちんとした堅苦しい御性格に対して「うるはし」を用いるのは②で揚げた用例の用い方と同様である。

次の用例はどうか。

④かかるほどに、このみだれがはしき者のなかをかきわけ、さすがにうるはしく装束きたる者、南面にただ参りに参りて、こは何にかと思ふほどに、宣命といふもの読むなりけり。（巻第五　浦々の別）

伊周・隆家に配流の宣旨がしきりに下るという場面である。

この乱暴な放免どものむらがる中をかき分けて、さすがにきちんと装束を着けた者が、寝殿の正面にまっすぐ参上して、これは何であろうかと思っているうちに、配流の宣命というものを読むのであるが、このきちんと装束を着けて宣命を読む者は宣命使である。『新編日本古典文学全集―栄花物語』の頭注一六によると、この宣命使は惟宗允亮とある。勅命を宣べる役目の者であるから装束も乱れなく、きちんと正装をし、堅苦しく厳粛な雰囲気の中で流罪に処する意の勅語が発表される。つまり、公式の格式張った儀式の際に、身に付ける装束着用に関して「うるはし」は用いられる。こういった例は『源氏物語』にもある。

○人のまよひすこしづめておはせむと中納言も思して、さるべきやうに聞こえたまふほどに、内裏より、中宮の仰せ言にて、宰相の御兄の衛門督、ことごとしき随身ひき連れてうるはしきさまして参りたまへり。（「総角」）

この「うるはしきさま」は、宰相の御兄の衛門督が、きちんとした束帯の正装をしている場合に用いられている。また女性の装束姿に対しても「うるはし」は用いられる。

○よき若人ども三十人ばかり、童六人かたほなるなく、装束など

も、例のうるはしきことは目馴れて思さるべかめれば、ひき違へ、心得ぬまで好みそしたまへる。（「宿木」）

お付達の若女房三十人ばかり、女童六人の装束に対して、いつものようにきちんと整ったきまりきったものでなく、趣向を凝らした衣装をお召しになっているが、格式張った儀式の折、若い女性達の正装に対して「うるはし」は用いられている。

この他、『源氏物語』には男女の装束に関して「うるはし」が用いられている場面がある。[5]

こういった装束着用に関する描写は『大鏡』にもみられる。[6]

○二十一日未時ばかり、起き居させたまひて、御冠し、掻練の御下襲、布袴をうるはしく装束かせたまひて、御手水召せば、何事にかと、関白殿をはじめたてまつりて殿ばらも思し召す。

道長は御冠を被り、掻練の下襲に布袴をつけて身形を正すが、その布袴をきちんと着用することに対して、「うるはし」は用いられている。格式のある道長が正式の身形をするのである。

このように随所に装束に関するものに「うるはし」は用いられている。

次の用例を検討していくことにする。

⑤世の中ともすればいと騒がしう、人死になどす。さるは、帝の御心もいとうるはしうおはしまし、殿の御政も悪しうもおはしまさねど、世の末になりぬればなめり、年ごとには世の中心地起りて、人もなくなり、あはれなる事どものみ多かり。（巻第八　はつはな）

疫病が流行する。この箇所、『新編日本古典文学全集―栄花物語』の頭注一一によると、

為政者の人格や政治に問題があるとき、天が諭しとして天変地異を起す、という当時の考え方による。

とあるが、一条帝の御性格も大層きちんとしていらっしゃるし、殿（道長）の御政事も悪くはおありにならないのに、世の中はともすれば騒がしく人が死んだりした。そして、毎年毎年、世の中に疫病が流行して、人が死んで、しみじみとした事ばかりが多くある。というような内容である。

一条帝という最高位の男性の御性格がきちんとしていることを「うるはし」で表現している。こういった例は②でも記した通りであるが、性格を「うるはし」と表現している場合はいずれも、「きちんと」・「端正」と語釈すると文意に適う。

次の用例を揚げる。

⑥出でさせたまふままに、うるはしき御装ひにて、いと若君の御戴餅せさせたてまつらせたまふ。御乳母の小式部の君いと若やかにてかき抱きたてまつりて参りむかふ有様、なべてにはあらぬかたちなり。（巻第八　はつはな）

道長の四女嬉子は二、三歳ぐらいでいらっしゃるので、御戴餅の儀をなさろうとしているのである。殿（道長）はお出かけぎわに、きちんとした束帯姿の第一礼装をし、いと若君（嬉子）の御戴餅の

儀をおさせ申し上げなさるのである。こういった厳粛な儀式の雰囲気の折に、高官位の道長は元旦の儀式のため参内しようと、束帯姿の第一礼装をし、そのきちんとした格式張った威厳のある姿をいう。したがって、「うるはし」は文脈上「きちんと」とか「端麗」と語釈するのが最も適切である。このような装束に関することに「うるはし」を用いる例は④でも記したが、平安文学において随所に見られる。

次の用例は中宮彰子の描写である。

⑦御髪同じやうなることなれど、えもいはずこまやかにめでたくて、御丈に二尺ばかり余らせたまへり。御色白くうるはしう、酸漿などを吹きふくらめて据ゑたらんやうにぞ見えさせたまふ。（巻第八　はつはな）

中宮彰子のこの時の御年は二十歳ぐらいである。御髪は毛筋も細く立派であって、御身長よりも二尺ばかり余っていらっしゃる。御肌色は白く「うるはしう」とある。文意に沿って「うるはし」の語意を考察すると、この辺り中宮彰子の美表現が続く。肌色は白くとあるから、「美しく」と語釈すると自然な訳になる。しかし、「御色白くうるはしう」という用い方は今のところ例をみない。そこでこの箇所の語句の異同を調べてみると、富岡家旧蔵本に「うるはしう―うつくしくて」とあり[1]「御色白くうつくしくて」という本文になるが、この本文の方がより自然に文意が通じる。すなわち、中宮彰子は二十歳ぐらいであるが、大層若々しくいらっしゃって、小柄な方である。したがって、可愛さを含んだ美しさをいうのである。このように考えて、当該箇所の本文は、「御色白くうるはしう」より、「御色白くうつくしくて」の方が妥当であると思われる。

次の用例はお湯殿の儀の描写である。

⑧御湯殿酉の時とぞある。その儀式有様はえ言ひつづけず。火ともして、宮の下部ども、緑の衣の上に白き当色どもにて御湯まゐる。よろづの物に白き覆ひどもしたり。宮の侍の長仲信舁きて、御簾のもとに参る。御厨子二人うるはしく装束きて、取入れつつむめて御瓮に入る。十六の御瓮なり。（巻第八　はつはな）

若宮（敦成親王）のお湯殿の儀式は酉の刻に行われる。その準備の場面であるが、御厨子所の女官が二人正装をして、桶を取り入れては、湯の加減をして御瓮に入れる。この御厨子所の二人の女官の装束姿が特に「うるはし」と表している。「うるはし」の語意を文脈に沿って考察すると、「端正」とか「端麗」という意味が最も文意に適う。この場合格式張った慶事の儀式であるため、御厨子所の二人の女官はきちんと正装をし、うるはしいのである。換言すれば「端麗」となる。

こういった若宮が誕生しお湯殿の場面は、『紫式部日記』にもみられる。

○よろずのもののくもりなく白き御前に、人の様態、色あひなどさへ、けちえんにあらはれたるを見わたすに、より墨絵に、髪どもをおほしたるやうに見ゆ。いとどものはしたなくて、かか

やかしき心地すれば、昼はをさをささし出でず、のどやかにて、東の対の局より、まうのぼる人々を見れば、色ゆるされたるは、織物の唐衣、おなじ袿どもなれば、なかなかうるはしくて、心々も見えず[8]

この描写中の「うるはし」は、女房たちの装束、唐衣から袿にいたるまで、綾織物で白一色に統一され、大勢の女房たちの装束の色が、同色で揃った美しさをいう。今の場合も同じような場面で、両者いずれも女性の装束に視点を据え「うるはし」と捉えている。

いずれの場面も公的な慶事の儀式のため、人工的に整えられ格式張った堅苦しい雰囲分の中に、「うるはし」という格式高い整った美は存在する。

次は行幸が近づき準備をする場面である。

⑨かくて若宮を、いとおぼつかなうゆかしう内に思ひきこえさせたまふによるの行幸なれば、さきざきのよりも殿の御前いみじういそぎたち、いつしかとのみ思し急がせたまふに、やすきいも御殿籠らず、このことのみ御心にしみ思さるるぞ、げにさもありぬべき御事の有様なるや。神無月のつごもりの事なん。かくてこたみの料とて造らせたまへる船ども寄せて御覧ず。竜頭鷁首の生ける形思ひやられて、あざやかにうるはし。（巻第八はつはな）

この一節は、『紫式部日記』にもほぼ同じ文面で表れる。

○その日、あたらしく造られたる船ども、さし寄せさせて御覧ず。竜頭鷁首の生けるかたち思ひやられて、あざやかにうるはし。

これについては、すでに拙稿「平安文学語彙の研究―『紫式部日記』における〝うるはし〟[9]」で記したが、行幸の折に用いる新しく造らせた船を、池の水際に寄せて道長はご覧になられる。その船とは竜頭鷁首の船であるが、生きた本物の姿が想像されるほど、「あざやかにうるはし」と称讃している。

竜頭鷁首について『日本古典評釈全注釈叢書―栄花物語全注釈』の注によると、

竜頭・鷁首の船は二艘で一対とし、一隻の船首には竜の形、他の一隻には鷁（水鳥）の形の彫り物を付ける。楽人の乗る船で、竜頭の船には唐楽、鷁首の船には高麗楽が乗る。

とあり、その船には唐楽、高麗楽の楽人が乗る。また、『源氏物語』の「胡蝶」の巻にも、「唐めいたる舟造らせたまひける」と竜頭鷁首の船を「唐めいたる舟」とあり、「竜頭鷁首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて」とあり、竜頭鷁首の船は、唐風に派手な飾りつけがしてある。すなわち、唐風とはあざやかに彩色した派手な美しさをいう。今の場合も同様に、中国的雰囲気が辺り一面に漂う中から生まれてくるあざやかな派手な美感を「うるはし」と捉えている。「うるはし」は上接語「あざやか」という、視覚的にはっきりきわだってくっきりと映える派手な美しさを伴って、「うるはし」はより本領を発揮する。このように考察して、「あざやかにうるはし」を現代語訳すると、「きわだって美しく立派である」となる。

次は⑨の連繋節である。

⑩行幸は寅の時とあれば、夜よりやすくもあらず仮粧じ騒ぐ。……。寝殿の御しつらひなど、さま変へしつらひなさせたまひて、御帳の西の方に御椅子立てさせたまへり。それより東の方にあたれる際に、北南の端に御簾懸けわたして女房ゐたる南の端のもとに簾あり、すこし引き上げて内侍二人出づ。髪上げ、うるはしき姿ども、ただ唐絵か、もしは天人の天降りたるかと見えたり。（巻第八　はつはな）

一条天皇が土御門第へ行幸する場面である。行幸は寅の刻ということであるから、夕べのうちから心も落ち着かず身づくろいをして大騒ぎをするのである。寝殿の御飾りつけなどは、いつもと趣向を変えて立派になさって、御帳台の西側に天皇の着席なさる椅子をお立てになっている。そこから東の方に当る部屋に、北南の端に御簾をかけわたして女房達が並んでいる南の端の所に簾があり、それを少し引き上げて内侍が二人出てきた。その二人の内侍が髪上げをし、「うるはしき姿」は唐絵か、もしくは天人が天降ったかと見えた。とあり、髪上げをした二人の内侍の容姿を「うるはし」と表している。そして、この内侍が髪を結い上げている女性の姿はまるで唐絵のようでもあり、天女が天降ってきたようだと、評しているが、これと似通った描写が『紫式部日記』にもみられる。

○行幸は辰の刻と、まだ暁より、人々けさうじ心づかひす。……御帳の西面に御座をしつらひて、南の廂の東の間に、御椅子を立てたる、それより一間へだてて、東にあれたるきはに、北南のつまに御簾をかけへだてて、女房のゐたる、南の柱もとより、簾をすこしひきあけて、内侍二人出づ。その日の髪上げうるはしき姿、唐絵をかしげにかきたるやうなり。

とあり、これについては、拙稿「平安文学語彙の研究―『紫式部日記』における〝うるはし〟」[10]でも記したが、萩谷朴著『紫式部日記全注釈』に、「髪上げうるはしき姿」について詳しいお説がある。再び記しておく。

……剣璽の内侍として最も公式な晴れの容粧をしているわけであるから、髻はもちろん、髷も前髪も鬢も髱もあり、蔽髪・釵子・刺櫛・簪などをつけた唐風の本格的な髪上げ姿であると思われるからである。すなわち、唐風のスタイルは、いかにも格式張った感じがするものであって、髪上げ自体が「うるはし（端麗）」というべきであったから、「うるはしき髪上げ姿」といっても結果は同じなのであるが、整髪スタイルそのものがいかにも端麗という印象を与えるので、「髪上げうるはし」と、名詞を先に出したのであろう。

とあり、唐風の髪上げスタイルは格式張ったきちんとした感じがする。それを、「うるはし」と解していらっしゃる。また、唐風美人として、ふっくらとした美人顔でオールアップに結髪している吉祥天女を揚げていらっしゃるが、そのような女性や、万葉時代の結髪した女性をいうのであろう。

結髪した女性を「うるはし」と讃美している描写は『枕草子』中にも「いとうるはしう、長き髪を引き結ひて」（一八三段）[11]とあり、きちんと乱れなく堅苦しく結髪している女性の容姿は唐風美人であ

り、そのような唐風美人を「うるはし」で表すのである。すなわち、「うるはし」は中国的美を指し、「なまめかし」は日本的美を指すといえる。

さて、今の場合の「うるはし」は、文意から考察して、「容姿端麗」という言葉がある如く、「端麗」と訳すのが最も適切である。

（続）

注

（1）（5）北村英子「『源氏物語』における〝うるはし〟」『古代中世文学論考第十五集』所収（平成十七年五月　新典社）

（2）『栄花物語』の用例は以下全て、新編日本古典文学全集（小学館）による。現代語訳、頭注等全般にわたって同書を参考にした。

（3）『源氏物語』の用例は以下全て、新編日本古典文学全集（小学館）による。

（4）『大鏡』の用例は以下全て、新編日本古典文学全集（小学館）による。

（6）北村英子「『大鏡』における〝うるはし〟」（『樟蔭国文学』第四十二号、平成十七年一月）

（7）松村博司著『栄花物語全注釈』日本古典評釈・全注釈叢書（昭和四十四年八月、角川書店）

（8）『紫式部日記』の用例は以下全て、新編日本古典文学全集（小学館）による。

（9）（10）北村英子「平安文学語彙の研究―『紫式部日記』における〝うるはし〟」（『大阪樟蔭女子大学論集』第四十五号、平成二十年一月）

（11）北村英子「『枕草子』の語詞―〝うるはし〟」（『樟蔭国文学』第三十八号、平成十二年一月）による。